

研究報告

【氏名】 内田 和典

【所属大学院】(助成決定時)
首都大学東京大学院人文科学研究科

【研究題目】
東北アジア先史時代人類の集落構造と生業体系の基礎研究
—極東ロシアアムール下流域における考古学研究—

【研究の目的】

申請者は、東北アジア地域における先史時代の生活文化構造を構築するために、極東ロシアアムール下流域に着目して、人類の活動痕跡が多く残される集落遺跡を対象に考古学研究を進めてきた。従来、東北アジア先史時代の歴史観は、「狩猟採集民」から「農耕民」へという社会経済の発展図式を基盤として考古資料の説明解釈がなされてきた。しかし、アムール下流域では、農耕がほとんど発達しなかったと考えられており、こうした単線的な図式によって社会内容を説明することが困難である。そのため当該地域において新たな説明解釈を提示するには、まず第一に考古学的方法論によって実証的に資料を検討する必要がある。そして生活基盤となる集落や生業の構造や体系などについて、他の東北アジア地域との対比モデルの構築を目指し、中国文明を中心とした稲作中心史観へのアンチテーゼを行うことによって、より有効な方法・解釈を得ることができると考える。

【研究の内容・方法】

研究内容

アムール下流域における先史時代の集落構造と生業体系を復原するためには、研究の基礎データを目的的に収集する必要がある。そのため申請者は日露共同調査隊を組織し、新石器時代後半期から初期鉄器時代遺跡の発掘調査を計画し、ロシア連邦ハバロフスク地方コムサモリスク市ニジネタンボフスコエ(以下 NTB と省略する)遺跡群において発掘調査を実施した。

当遺跡群は、アムール河の河川堆積によって形成された河岸段丘上に 50 数基を越える住居址と集中的な墓域が形成されており、当該期の集落構造を考察できる良好な遺跡である。2005・06 年度には NTB2 遺跡において 2 軒の大形住居址の発掘調査を実施し、初期鉄器時代の生活・精神文化を考える上での基礎的資料を多く得ることができた。また 2006・07 年度には、NTB5 遺跡において、20 数基の墓域を検出し、多数の人骨や獣骨、鉄器、土器、装飾品等を確認した。

当遺跡において得た成果は当該地域における基準資料となりえるものであり、徹底した実証的研究を進めるための基礎を整えることができたと言える。

研究方法

まず、当該期における生業体系を明らかにするために、土器、石器などの人工遺物と、炭化種子、土器付着炭化物など有機物遺存体との相関性を求めるために、それぞれの型式学的・類型学的な分類を進めた。現在、前者については申請者らがロシア人考古学者と連携して議論を重ねて検討を進めており、後者については、それぞれの専門家に分析委託を行っている。今後それぞれの結果を持ち寄ることにより、当該期のアムール下流域における生業内容の検討を行う上で蓋然性の高い議論ができるようになる。

次に当遺跡群の集落状況をモデル化し、初期鉄器文化期における集落構造を把握するために、土器編年の構築と層位学的検討、および放射性炭素年代値との相互参照による時間軸の設定を進めた。その上で住居址群と墓域との時間的関係性を把握でき、集落構造をモデル化し、他地域との比較化を進める基礎を整えた。

【結論・考察】

NTB 遺跡群では初期鉄器時代を中心とする良好な資料を得ることができた。当遺跡群は、アムール川河岸に近い地点に中世期遺跡があり、05・06 年住居址の南側地点には後期新石器時代の竪穴状住居址群が展開する。そのため NTB 遺跡群の住居立地は、南側からアムール河本流に向けて時代別に住居址が変遷しているものと考えられる。また 06 年住居址では土坑やピット群が直線的に並び、中央炉を囲むように小ピット群が円形に配列するなど長期間居住を念頭においた住居構築を行っていたことがわかる。さらに墓域に関しても層位学的に上下二層が確認され、下層面には人骨の頭位方向をアムール上流側に向けた埋葬状況を、上層面では、獣骨や大型ピット、焼土址などが確認されたことから埋葬行為に伴う祭祀行為の状況を把握することができた。今後は、こうした解釈

をより実証的に提示し、当時の社会・文化の内容の一端を構築するための検討を重ねていく必要がある。

